



Title	スワヒリ＆アフリカ研究 第33号 編集後記/奥付
Author(s)	
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2022, 33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/87080
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

✎ 編集後記 ✎

本誌 33 号は、久しぶりに 100 頁を超えて、雑誌らしい厚みのある体裁になりました。昨年 10 月にノーベル文学賞を受賞したタンザニア出身の作家グルナ氏に対するタンザニア人の反応や、昨夏コロナ禍のウガンダヘフィールドワークに赴いた際の体験など、タイムリーなレポートも加わり、アフリカ研究を志す者たちの「集いの雑誌」の色彩が一層濃くなった号となりました。

ただ、このように書いても、「雑誌の厚み」を実感しているのは、献本を受け取った執筆者たちと数名の関係者しかいません。大学の機関リポジトリでウェブ公開するようになってからは、雑誌本体の発行部数も減り、発送もほとんど行われなくなりました。必要な論文はウェブで検索可能だし、物理的な場所も取らなくなってよかったように思いますが、「一期一会」に集った複数の論考が、一つの雑誌を形作るアナログな「アフリカン・コスモス」の様相を、手の中に実感できなくなったことは、少し寂しいことでもあります。

時代とともに変化していく事に対して、寂しさを感じる人が多い 1 年でもありました。我が研究室がある大阪大学外国語学部のキャンパスは、昨春から新しいキャンパスに移りました。すこし「都会寄り」になって便利になりましたが、何棟もの校舎、体育館、運動場が備わった旧キャンパスからすると、10 階建ての校舎ひとつというキャンパスは、やはり寂しいものがあります。

また、2020 年ほどではなかったとはいえ、2021 年も引き続きコロナ禍で、リモート授業を余儀なくされる時がありました。パソコン越しの授業はなんとも歯痒く、また老齢の教員にとっては機材の使用も慣れないままですが、学生の中には「リモート授業の方がいい」という人もいて、戸惑いとともに、もう旧来のような大学生活は望めないのかも、という寂しさも感じました。

ただ、どのような環境にあらうとも、スワヒリ語専攻の使命は変わりません。アフリカに関心をもって学ぶ学生を育て、アフリカ理解を深めるために研究を進め、その成果を発信する。ウェブ公開が中心となりつつも、毎年こうして『スワヒリ&アフリカ研究』を発行し続けることができるのは大きな幸いです。今号に論考を寄せてくださった皆さま、査読の労をとってくださった皆さま、心よりお礼申し上げます。今後も『スワヒリ&アフリカ研究』に変わらぬご支援、ご投稿を、心よりお願い申し上げます。

(2022 年 2 月 28 日 K)

投稿・問い合わせアドレス： swahiliandafrica@gmail.com

大阪大学機関リポジトリ OUKA (Osaka University Knowledge Archive) にて公開中

2022 年 3 月 15 日発行

スワヒリ&アフリカ研究 第 33 号

発行 大阪大学大学院言語文化研究科 スワヒリ語研究室

〒562-8678 大阪府箕面市船場東 3-5-10

編集 米田信子、竹村景子、小森淳子

印刷 株式会社アイジイ 〒531-0072 大阪府大阪市北区豊崎 4-6-3

ISSN 0915-8758